

II-C-14

アロエ特殊エキスによる肝硬変症の治療経験

和歌山県立医科大学第三内科

○湯川 進、長谷川庄一、川野恵造、野本 拓

目的・慢性肝疾患、ことに肝硬変症の治療に関しては有効な薬剤が究めて少ないのが現状といえる。古くからアロエは万病の治療薬として、種々の病に用いられ、その有効性については万人の認めるところである。しかし、アロエの中のいずれの成分がどのような疾患に効くのかはよく分かっていない。今回、アロエから抽出された特殊成分であるアロエ特殊エキスを比較的長期間に渡り肝硬変症患者に経口的に投与し、その効果を検討する機会を得たので報告する。

方法・対象は肝硬変症患者男5名と女3名の計8名で、平均年齢は56才(37~71才)であった。ウイルス検索によるその原因は不明の1例を除き、B型2例、C型5例で、肝硬変症の程度は3名が非代償期にあり、腹水、食道静脈瘤や肝性脳症などが認められたのに対し、残りの5名は代償性の肝硬変症で自および他覚的にもほとんど異常を示さなかった。アロエ特殊エキス(アロエ療法研究所製)投与時点における対象患者に対する使用薬剤は小柴胡湯が7名でもっとも多く、プレゾニゾン併用例が3名で、その他肝底護剤は全例に投与されていた。また、臨床検査上での肝予備能を示す検査値もほぼ一定していた。アロエ特殊エキスの治療期間は無効例の1例を除き、1~3年間で、5~10ml/日の量を経口的に投与し、3~6か月ごとに自覚症状、肝予備能を含む肝機能検査、腹部エコー・CTなどの変化について検討した。

結果・①自覚症状。全身倦怠感の改善する例が多く、8例中5例に認められた。また、3例で食欲亢進、4例で便通正常化を示した。② α -フェトプロテイン(AFP)(ng/ml)。7例で100~400の範囲で増加を示したが、1例の無効例を除き6例では50以下となり、その値は観察期間中持続していた。③肝機能検査。トランスアミナーゼの改善は認められなかったが、CES、エステル比、HPTなどの肝予備能は8例中5例で改善を示した。④腹部エコー・CT。観察期間中全例でSOLなどヘパトーマの併発を示唆する所見の出現を見なかった。

結論・アロエ特殊エキスは肝硬変症患者のAFPを低下させ、ヘパトーマへの移行を阻止する可能性があり、引き続きフォロー・アップ中である。